
ライフライク

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ライフライク

【Nコード】
N0730E

【作者名】
ともみつ

【あらすじ】
馬鹿がいた。喧嘩をしても負けなくて、勉強しなくても成績がいい。集まる友人はただその騒ぎが楽しいだけ。だからその中心人物は手を焼く存在だった。初任の新人教師には特に。

「はあ、どうしてあんたいつもこうなのよ……」

「いや、毎度のことじゃん？」

どうしてか楽しい。俺の正面で、教員机の連なる中の一つで、肩肘付いて、手のひらを額に当てているのは、愛称ななちゃんこと、俺の担任中井菜々美。国語教師。赴任二年目の二十四歳。俺の七つ上。

「その毎度に付き合わされるこっちの身にもなりなさい」

怒っているのに、疲れてる。いやまあ、理由は分かるけどさ。

「つかさ、あれ、俺のせいじゃないし。何で俺だけなわけ？」

言わずと知れた、ここは職員室。俺の姿を見た教師共が、またか、と一斉に呆れてる。俺って結構有名人じゃね？　とか思うけど、まあ実際間違いない。

「向こうは工業高校でしょうが。あんた一人やりすぎなのよ。ってか、何で数人相手にあんたは勝てるのよ……」

「俺はただ、肩ぶつかっていちやもん付けられたから買ったただけだし。まあ弱かったけどさ」

昨日、工業の奴らとコンビに前で肩がぶつかって、そのまま売られた喧嘩を買って、勝っただけ。つか、あいつら弱いくせにでしゃばってるんじゃないよって感じじゃない。

「あんたねえ。何しようが勝手ってわけじゃないのよ。主に私に責任が回ってくるんだから。毎日忙しいってのに、余計な面倒ごとまで持ってこないでよ……」

盛大なため息を吐きながら、書き慣れたように何かの書類に俺が起こした件の内容を書いていく。これが校長とかに渡って、まあ謹慎か何か罰を受ける。慣れてるし、大したことない。

「あははっ。ななちゃんマジ疲れてんね」

「誰かさんのせいでね。後中井先生って呼びなさい」

キツと鋭く俺を見てくるけど、そういう顔も俺は結構好き。だって、やんわりとした表情も可愛いけど、そういう表情も綺麗だ。

「はあ、もう。とりあえずこれだけね？」

「あん。そんだけ。で、結果はいつ出るわけ？」

「あんたねえ、合格発表じゃないんだから、もっと反省しなさいよね」

「してるしてる。丘よりも低く川よりも浅くだけど」

なんかすっげー楽しい。ななちゃんと話していると、飽きないんだよな。

「馬鹿たれ。重症じゃないだけ、相手側に感謝しなさいよね、ほんと」

「分かってるって」

俺は何の被害も無い。あいつらもどうせ自分たちからふっかけてんだし、余計なこと言わないだろう。言ったら同じ目に合わすだけだ。

「もう良いわよ。今日は帰りなさい」

「へーい。ななちゃん仕事頑張ってるね」

「あんた、人の話聞きなさいよね……」

劳いの言葉を掛けたつもりなのに、鬼の形相で睨まれた。

翌日、HRの後、ななちゃんに呼ばれた。カバンも持って来いとまあそれでどういふことかは分かった。

「お前、またやらかしたのか？」

「へへっ、かつけーだろ？」

ダチが笑ってる。だから俺も笑う。

「もう、田所。あんたねえ、ななちゃんに迷惑掛けすぎ」

「いつものことじゃなか。そう責めるなっ」

このクラスは、俺が問題児だと言う。だから俺はそれを実行する。そうすると、俺は周りから期待される。次は何を仕出かしたんだ？

と、面白そうに話題にして、俺を囁し立てるから。だから、俺はやる。問題児なのに、俺を友達と思ってくれる奴らばっかだから。

「んじゃ、行ってくるな」

「反省文きちんと書いきなさいよ」

笑いが俺の背中を押してくる。ダチの楽しみは、俺の罰。それは笑いになって周りを楽しませる。なら、俺はその提供者になる。それが俺だから。

「失っ礼しまーす」

俺には見慣れた教室の入り口。他の生徒は恐れている入り口。俺はそこをいつものように開けて入る。

室内に香るコーヒーと煙草の混じった匂い。くせえけど、何か落ち着く。

「田所、お前は何なんだ？」

中に入ると、いきなりごつい教師が二人、俺を見てため息を吐く。いきなり失礼じゃね？

「問題児」

訊かれたから俺は、即答する。なのに返ってくるのはこれまたため息。何だよ、そっちから訊いって落胆すんなよな。

「申し訳ありません。私の指導不足で」

生活指導室の奥から、ななちゃんが出てくる。

「まあ、中井先生には、ちと重い生徒でしょう」

「いやいや、田所が全く反省し無いのが問題ですよ」

俺命名の進路指導の教師、ゴリラとマントヒヒがななちゃんに諦めを含んだ声をかける。ななちゃんがそれに本当に申し訳無さそうに頭を下げる。霊長類に頭下げなくても良いのに。

「ほら、来なさい」

俺を睨むななちゃん。ここは大人しく従う。俺だって自分の仕出かしたことに對して、目ヤニくらいは反省してる。

進路指導室の奥にある、ちょっと隔離されたスペース。周りを教材のダンボールや木の板で仕切られ、そこに二つの長テーブルを合

わせたものと、パイプ椅子がある。知ってる奴は知ってる。謹慎を受けたら、ここで一日中反省文やら書かされ、校長とかに説教を受ける。

「で、処分は？」

予想はついてるから、別に何てこと無い。

「……もう少し緊張とか出来ないわけ？」

「無理。慣れた場所で緊張って出来ないっしょ？」

ここは教室よりも楽しくはないが、落ち着ける。でも、ななちゃんはまだため息を吐く。ほんと疲れてるなあ。折角の美人顔に隈が出来てるし。

「ななちゃん、ちゃんと寝てる？」

「誰かさんのせいで、連日寝不足よ」

二人してパイプ椅子に腰を下ろす。そして俺を、恨めしそうに見る。そっか。毎日俺のこと考えてくれてんだ。何か嬉しいかも。

「そんなに見つめられると、照れるって」

冗談めかして言う。本当は少し、ドキッとしてもるけど、言わない。恥ずいし。でもやっぱりななちゃんは可愛いし綺麗だ。

「人の話聞きなさいよ……」

頭を押さえる。これ以上からかうと、さすがにちょっと可哀想だ。この辺で真面目に話を聞こう。

「聞く」

「へ？ あ、うん」

俺が真面目ぶった顔で見ると、ななちゃんが少しだけびくりした。てた。

「他校生との喧嘩。三人が擦り傷、打撲の軽症……」

「んなこと良いつて。さっさとやってよ」

マニュアル通りなら、俺の犯したことを直視させるために言うんだろうけど、初犯じゃないからもう予想が回答と一致してる。

「はぁ……」。田所、あんた謹慎五日」

そんだけか。まあ、その程度と捉える方が俺らしい。

「どつちで？」

謹慎と言つても、二つある。一つは自宅謹慎。放課後までの外出禁止。そしてもう一つは、指導室謹慎。ここで反省文と説教、時には一人で授業を受ける。

「指導室謹慎よ。HRはちゃんと出ること」

「知ってるし」

朝と放課後のHRだけ顔を出して、後はずっとここ。正直肩が凝るが、自分のやったこと。どうしようもない。

「知ってるじゃないでしょ。あんた、悪い事したって自覚を持ちなさい。いい加減にしないと退学になるわよ」

「マジっ？ それ困るって」

別に卒業出来なくなるとかじゃなくて、退学なんて喰らえば、ななちゃんに会えなくなる。それは困る。

「じゃあ、反省しなさい」

ドカツと。原稿用紙の束をななちゃんが、机に乗せる。

「あれ？ もう行くの？」

これが何か分かるでしょ？ と意味ありげな眼差しを向けると、ななちゃんが立ち上がる。

「昼休みまでに最低十枚書きなさい。チェックに来るからね」

まあ、一限目の授業があるんだろうけど、何だか一人にされるのが、少しだけ寂しく感じた。

「あ、あのさっ」

「ん？ 何よ？」

とつさに呼び止めたけど、別に言いたいことは浮かばなかった。

「ちゃんと書きなさいよ」

「分かってるって」

一瞬怪訝そうに俺を向けたけど、そのままななちゃんは仕切りの向こうに消えた。室内に残された俺は、いつも以上に、大きなため息を吐いた。それでも胸に燦る変な感覚だけは、なかなか消えてはくれなかった。

「あゝ、腹減ったあ」

四限目の終業のチャイムが鳴ると同時に、俺はうんと手を天井に掲げて背伸びをする。物凄くやり遂げた感のある背伸びが出来た。大きく深呼吸をする。

「臭え」

煙草の匂いが肺を埋め尽くす。

「ゴリ………せんせえー、窓開けて良いっすか？」

仕切りの向こうに向かつて尋ねる。危うく口走るところだった。

時々俺の様子を見に気ながら、良く分からん内容の話や下らない談笑をしてるゴリラとマントヒヒとの四時間を、俺は耐え抜いた。

「ちゃんと書いたならね」

「うをつ！？ ななちゃんっ」

訊いておきながら、窓を半分以上開けていると、ななちゃんの顔がぬつと出てきてびびった。

「返事聞く前に何開けてるのよ………」

「いやだって、くせえし。昼飯食えないじゃん」

「まあね。で、ちゃんと書いたでしょうね？」

二つの窓を開けると、涼を含んだ風が顔に溜まった熱を運んでくれる。無臭の風の中に、ななちゃんの匂いがかすかにして、良い匂いだった。

「それ。俺さ、昼飯買ってきていい？」

「良いわよ。でもすぐに戻ってくること」

「りょーかい」

財布をお手玉のように宙に回しながら、指導室を出る。ちょっと出遅れたから、売店込んでるだろうけど、学食行くわけにはいかないし、並ぶしかないな。

貧民が支給品に群がるような、毎日の戦場の中で、俺は惣菜パン一つと、菓子パン二つ、ジュースを何とか手に入れ、指導室に戻る。「うわ、出前っすか。うまそー」

ゴリラとマントヒヒが近所の中華料理屋の料理を食ってた。ずい。人間がパンだったのに。

「やらんぞ」

「いらねえっす」

「じゃあ言うな」

誰がゴリラとマントヒヒの口つけたもの食うかったの。

「おっ？ 熱心だねえ」

仕切りの向こうに戻ると、ななちゃんが、読書するような目で俺の反省文の文字を追っていた。まあ、ちよつと自信作だし、そんなに真剣に読まれると、嬉しいけど、照れ臭い。

「どお？ 結構面白いつしょ？」

カレーパンの袋を開けて、早速口に運ぶ。

「・・・何よ、これ？」

チョココロネを食べ終わって、ジャムパンを食べようとしたら、ななちゃんがやつと顔を上げた。

「俺ってさ、結構文才あると思わない？」

「そうね。つい読み耽りそうだったわ」

おお。ななちゃんが褒めてくれたよ。やべえ、ちょー嬉しいんだけど。俺作家デビューとかしちゃうかも？

「だろ？ 自分で読んでて見事な短編だと思った」

「そうじゃないでしょ」

けど、俺の話はななちゃんに遮られた。いつものどこか頼りなくて、放っておけない友達みたいな教師じゃなくて、れっきとした一教師としての凛とした綺麗な眼差しだった。久しぶりにそんな真剣な顔されるから、少し戸惑いが生まれる。

「私、なんて言っただけ？」

「反省文書け」

俺の答えにななちゃんが分かったのね、と頷く。そりゃあ、何度も書いてるし。

「で、どうして短編小説になってるのかしら？」

「書くこと無かったし」

何度も書くと、さすがに次はやらないようにする、とかもうしませんとか言っても、信じてもらえるわけないし、守るつもりもない。だからノンフィクションでとりあえず反省の気持ちも少しは書いた。「いい加減、本当に怒るわよ」

「もう怒ってるじゃん」

その顔で怒ってないわけないし。どんな場所にいたって、いつもその姿を探してた俺には、ちょっとした表情の変化だってすぐに分かる、つもりでいる。

「書き直し」

「えーっ！ 何で？」

「何でも何も、これのどこが反省文よ。自分のしたことが、どういうことか、どうしてそんなことをしたのか、同じことを繰り返さないためにはどうすれば良いか、自分なりに考えてしっかり書きなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何か、違う。

「返事は？」

「あ、はい」

勢いに飲まれる形で頷くと、ななちゃんが立ち上がる。何か変だ。朝と表情が全然違う。

「ななちゃん、何かあった？」

キツとななちゃんが俺を見下ろす。

「あんたの行いの悪さが見直されるそうよ」

それだけ言い残すと、やっぱり不機嫌そうにななちゃんは指導室を出ていった。

「ありや、きつと何か言われたな」

俺だってただ馬鹿じゃない。演じてるだけだ。きつと再三の俺の悪行と特定教科の不振に対して、会議でも開かれるんじゃないかな。それでななちゃんが担任としてどうこう言われたんだろうな。

「ちょっと反省しないとな」

今初めて、申し訳ないという想いが生まれた。

それから放課後になるまで、俺は一人で原稿用紙に向かっていた。でも書くことは長くて二枚で終わって、後は適当に調子取りの内容を書いておいた。

「中井菜々美、か」

原稿用紙にななちゃんの名前を書いて、そこを指でなぞる。ふと脳裏を過ぎるのは、俺がななちゃんに出会ってこれまでしてきた悪行と、そのたびのななちゃんの顔。国語のテストの結果だけが赤点だったり、喧嘩したり、校舎の窓ガラスを割ったり、他クラスの黒板に悪戯したり、その度にななちゃんは担任としての責任やらで毎回心労に悩む顔を見せていた。でも、俺は止めなかった。

「笑ってくれたんだけどなあ」

それでも最後は、馬鹿を俺を軽く罵りながらも、苦笑染みた笑みを見せてくれたのに、今日に限って怒ってた。だから調子狂う。

「先生、ちょっと良いっすか？」

俺の呼び声に、ゴリラが顔を出す。何となく予想はつくけど、答えが一致してる自信がないから、俺は確認の意味で聞いた。

「なな……中井先生、俺のせいで担任降板とあります？」

途端、ゴリラの表情が意外そうに俺を捉える。ああ、そういうことか。なるほど。

「お前、聞いてたのか？」

「いや、何となくっす」

俺の処分に対しての会議かと思ったけど、ななちゃんの責任問題っぽい。

「お前がもっと更生してくれれば、中井先生の苦労も報われるんだぞ」

ゴリラが俺に説教してくる。まあ、蒔いた種は俺なんだし、この説教は正しい。

「聞いているのか？」

「聞いてますよ。要は俺が真面目になれば、中井先生は担任を降格されず、俺は卒業出来て学校側としても安泰にことを済ませられるってことっすよね？」

「そういうことだ」

分かってるじゃないか、と感心される。その言われはまるで無いんだけど。

「はあ、そっか。ななちゃんが担任辞めるのは嫌だしなあ」

だったら、俺が変わるしかないってことか。分かってるけど、何か嫌だな。俺が周りと同じ生徒になると、俺が一番にななちゃんを見れなくなる。一番近くで見てたいのに、一番になれない。

「んあゝ、分っかんねえなあ」

俺が真面目に成ればそれで良いんだけどさ、やっぱり俺が俺でなくなる気がして気が引けた。

「お疲れ様でしたー」

授業も終わり、今日の謹慎も終わる。意気揚々と俺は仕事をしている霊長類の隣を通り過ぎる。

「何がお疲れ様だ。馬鹿たれが」

そんな軽い叱咤を受けながら指導室を出ると、途端に清々しい空気が俺の鼻腔をくすぐる。

「空気が美味しいねえ」

良くあんな汚い空間で一日を耐えたものだ、自分を褒め称える。「さあて、どうすっかなあ」

靴に履き替え、校門を出る。素直に帰る気分じゃない。気分転換が必要。ゲーセンでも行くかな。

「あーすっきりした」

適当にゲーセンで憂さ晴らしすると、気分も上々に戻ってくる。何だかんだで二時間くらい遊んでたんだな。財布も随分軽くなったし。

「帰って寝るか」

今週いっぱいはその閉鎖空間で過ごさないといけないんだ。勉強のことなんて考えられるわけないし。

「さてと、とりあえずメールしとくかな」

あいつらも俺の処分を楽しみにしてるだろうし、報告しとくか。携帯とポケットから取り出し、開く。待ち受けはダチと集まって取った写真。その中にななちゃんがないのは、俺としては残念だけど、友達も大事にしないとな、なんて思いながらアドレス帳を開く。

「そっぴゃ、ななちゃんのアド知らないんだな、俺」

どこを探しても、ななちゃんのアドも番号も無い。改めてそれに気付くと、俺って何なんだろう？ という疑念が湧いた。

「えっ……」

息を吐きながらふと国道を視界に入れると、俺の携帯を持つ手に夕餉の香りをどこかに含んだ風が指先を舞った。

「あれ……」

ほんの一瞬だった。でも、俺にはその一瞬が途方も無く長く見えた。

白いワゴンが俺の横を通り過ぎ、俺の歩いてきた道へと消えていく。その中で俺の目は助手席に乗る一人の女に目を奪われた。

「……」

目を閉じ、窓に額を当てていた女の顔。それは、幾度となく俺が毎日追いかけた顔だった。見間違うはずが無い。過ぎ去った日も、まだ見ぬ明日も、俺が真っ先に追いかけた女だ。俺を馬鹿にして、俺のことで頭を抱えて、俺に笑ってくれる人の顔が、助手席にあって、俺の知らない男がハンドルを握ってた。

「嘘だろ……」

開いた携帯が、省エネ画面になって暗くなる。俺の手が何かを搾り出そうとするくらいに、携帯を握り締めていたことにも、俺は気づけなかった。ただ、流れる川のように、どこかへとその影を消した車列の中の一台の姿を、焼き付けるように振り返ったまま、その

場に立ち尽くした。

「ふむ。これに懲りたら、と言いたところだが、お前じゃ無理だな。次はもう少し手加減するんだぞ」

あの日から一週間。新しい週がようやく俺をここから解放する。

「ご迷惑をおかけしました」

「あ、ああ……」

今日からはいつも通りの日常に戻る。俺の侘びの言葉にゴリラが腑に落ちないような顔をしてる。つまんね。

指導室を出て、教室に戻る。毎日顔を合わせてる連中が俺の帰りを、笑いながら迎える。

「長かったな。どうだったよ？」

「別に。毎度のことだ」

「ちゃんと反省したの？」

「見せてやればいいんだろ？」

そんな連中の言葉を軽くあしらいながら、自分の席に着く。そんな俺の背中に、否応無く怪訝の視線が突き刺さるのが分かる。

「……なあ、やっぱ変じゃね？」

「う、うん。何だか最近、笑わないわね」

うるせえよ。ほっとけ。小声に心の中で応える。それを俺が口にする、いよいよクラスの雰囲気壊れる。それは俺の本望じゃない。

眠ってても、起きてても、俺の脳裏を過ぎり続ける一台の車。いつもとはまるで違う、ななちゃんの姿が頭の中を離れない。だから、周りのがいつも通りに振舞っているのを見ると、無性に苛立ちが募ってくる。

「はい、席に着きなさい」

よりによって、今日は初めからななちゃんの古文の授業。正直、サボろつかとも考えたが、ななちゃんの出鼻を挫くわけにはいかなかった。

「今日は昨日も言った通り、ここまでのテストするからね」

その声に室内にブーイングが起こるが、ななちゃんは気にすることなく用紙を配り始める。ギリギリまで単語帳を見てる奴や、机の中に開いた教科書を隠す奴。机に見えないように単語やらを書いてそれを腕で隠してる奴など、馬鹿ばっかだ。見ててうんざりする。

「田所。あんたには言ってなかったけど、テストだから」

思い出したようにななちゃんが俺を見る。

「余裕だし」

俺はななちゃんから顔を背け、窓の外に目を向ける。

「田所？」

ななちゃんが不思議そうに俺に声をかけてくる。そのいつも通りなのが、俺の心を否応無く掻き乱す。

「早く始めてください。中井先生」

俺の一言に、教室中が変な静けさに包まれた。一瞬、時が止まったのかと思った。黒板のほうに視線を向けると、ななちゃんが俺のことを、何か冗談のように見ていたが、俺はすぐに配られた用紙に目を移し変えた。ザワザワと奇妙そうに俺を横目に映す小言が聞こえるが、無視だ無視。

「はいはい。さっさと始めなさい」

ななちゃんの一蹴で、そんなざわつきが収まる。

（楽勝すぎてつまんね）

いつもは、わざと間違えてななちゃんに怒られたりするのが楽しいけど、そんな気にもならないし、普通に解くと、簡単すぎてまるでやる気が出ない。

さっさと解き終えると、俺は机に突っ伏した。

「……こら、寝ないの」

静かな教室内に、ななちゃんの小声が俺の耳元で囁かれる。コツン、と軽く頭を叩かれる。本当はめちゃくちゃ嬉しいはずなのに、あの日のあの光景が甦ってきて、真逆の感情を俺の中で沸騰してくる。

「………適当に書いたんじゃないでしょうね？」

「んっ」

腕の間から解答用紙を見せる。小さく息を呑む音が聞こえた。何かイライラしてきた。分かっているはずなのに、理解したくない俺が本音を口元まで運んでくる。

「・・・・・・・・にかく寝ない」

グツと肩を持ち上げられる。

「あっ・・・・・・・・」

それが癪で、肩を振ってその手を振り払って、また顔を伏せる。ななちゃんの少し不安そうな声が、俺の良心を痛めつけてくる。切なさ。そんな気持ちがある中で孤独を生み出してくる。

（馬鹿だなあ、俺って）

たかが男の車に乗ってただけじゃないか。ななちゃんだって良い大人だ。彼氏くらいいたっておかしくないのに、俺って子供だ。

そんな気持ちがある俺を情けなくさせる。俺の今までの行動の馬鹿らしさと子供っぽさが俺に羞恥を味あわせる。

（情けねえ。情けねえよ、俺・・・・・・・・）

心の中がもやもやとした黒い霧で覆われていく。薄れる現実と、誘う夢の間で、俺はななちゃんの前で俺らしくいられた思い出の中に、そんな情けない自分を逃避させた。

「あいつ、変わったよな？」

「そうよね。何だか張り合いがなくなったというか・・・・・・・・」

「つまんなくなっただけ」

「こらっ、はつきり言わないの」

ダチだった奴らが、俺に隠れて小話をしている。陰口を本人の前に言うなよな。結構傷つくぞ。早いもので、あの日から一月は経った。それでも俺は未練がましく、ななちゃんに別の意味で気を引くために、俺は素を遺憾なく発揮している。

「つまんね」

だから出てくるのは、ため息と、面白くも何ともない成績だけ。

「た、田所」

「あん？」

「今回は、どうだった？」

俺の機嫌を損ねないように、と当たり障りの無いように話しかけてくる、この間までのダチ。こいつらは今の俺に失望している。これくらいでそんな声のかけ方しか出来ないこいつらを友達と思った俺が馬鹿みたいだ。

「ほら」

聞きたいのは中間の結果だろう。さつき帰ってきた答案を見せる。

「うわっ」

「凄いわね……」

並ぶのは、クラス最高点ばかり。いつも赤点だった現国と古文もカンニングでもしたんじゃないかと思わせるくらいに、最高点。面白くも何ともない。でも、これでななちゃんは、担任としての責任は果たせたことになる。

「何かもう、面倒くせえ」

変わらないのは口調ばかり。ただそれにも覇気を見出せない。

一気に冷めた。

そう思ってるはずなのに、俺は諦めが悪い。そんな自分に嫌気が差す。

「田所。田所はいる？」

「あ？」

ななちゃんが昼休みにも拘らず、教室に顔を出してきた。

「あ、いた。ちょっと来なさい」

「……なんだよ。だりい」

乱暴に椅子を引き、立ち上がると、ドアに向かう。

「何？」

「うつ……い、良いから、ちょっと来なさい」

こんな感情出したいくないのに、勝手に出てくる。ななちゃんがちよつとビビッてる。そんな顔、見たくないんだけどな。

何も話すことはない。聞きたいことはうんとあるのに、聞けない。大人しくななちゃんの俺よりも少しだけ小さい背中を見ながら、ついていく。ななちゃんも何も声をかけてくれない。ちょっと前までなら、こんなに静かになることは無かった。必ず俺に対して、また仕出かしてえ、とか、あんたはほんとに、とか愚痴を苦笑しながら、言ってくれたんだけど。

（俺も素直じゃないんだよな）

素直に泣いて笑える奴が羨ましい。今の俺には、こんなにななちゃんの手を伸ばせば腕の中に納められるくらいに近いのに、どんなに手を伸ばしても届かない場所にいる気がする。

「あのさ」

「ん？」

声をかけないつもりだったけど、部屋の前の表示を見て、かけずにはいられなかった。

「何で、ここ？」

職員室とかなら、別に構わないけど、何でよりよっておなじみの指導室？ 俺、何も悪いことしてないんだけど。

「良いから、あんたに話があるの」

首を傾げながら中に入る。忘れてた匂いが甦る臭さだ。

「あれ？ ゴリラもマントヒヒもないじゃん」

でも、室内は無人だった。二人がいらないのなんて珍しいな。

「こら、先生たちをそんなで呼ばない」

「って」

叩かれた。何だか久しぶりの痛くない痛みだ。

「それで、何の話？」

毎度の仕切られたスペースに座らされる。ななちゃんの手には、何かの紙がある。

「そう構えなくて良いわよ」

別にそんなつもりはないけど、そう見えるらしい。

「もうすぐ昼休み終わるんだけど？」

さつき見た時、もう五分なかった。

「良いわよ。事情は話してるから、あんたは出なくて良いの」

「あー、そうですか」

釘を打ってたか。長い話にでもなるのかねえ。

「あんた、最近、随分変わったわね？」

「おかげさまで」

パイプ椅子の背もたれに体重を預けて仰け反る。ヤニやらなんやらで天井が黄ばんでいる。息が詰まりそうだった。

「何？ わざわざ褒めるために呼んだわけ？」

顔だけをななちゃんに向ける。見下ろしているように見えてるのか、ななちゃんが少し緊張しているように見えた。今まで俺の前でそんな態度なんか取らずに、ありのままに接してくれたのに、とかぼーっと思った。

「違うわよ。話があるの」

そんなこと何度も言わなくても分かってる。話も無いのにこんな所に呼ぶはず無いだろ。

「これ見なさい」

テーブルの上にさつき手に持っていた紙を見せる。

「この一ヶ月のあんたの評価と、中間考査の結果よ」

「それが何？」

興味ない。どうでもいいし。

「遅刻し放題だったのに、ここ最近、誰よりも早く登校してるらしいじゃない」

「悪いわけ？」

「いや、責めてないんだから、そうふて腐れないでよ」

「なんなんじゃねえもん」

もやもやが晴れないから、イライラしてるだけだし。別に怒ってない。

「まあ、遅刻しなくなったのは私としては嬉しいことは嬉しいけど、出来ることをどうして初めからやらないのよ？」

やっぱり嬉しいんだ。そっかそっか。ななちゃんは俺が遅刻しなだけで嬉しいのか。俺は嬉しくも何とも無い。なんか余計にモヤモヤしたものが、俺の中で大きくなるだけだ。

「別に。今は家にいたくないだけだし」

「？ どういうこと？」

「中井先生には関係ないですから」

何で誰もいない学校に行きたいのか、俺だって良く分かんねえ。ただ、今日は何か違うかもしれないかと思うと、早く学校に行きたくなる。それでも、やっぱりいつもと同じなんだけど。

「ねえ、田所」

「何？」

「何があつたの？」

「何が？ ははっ、本人のくせに。まあななちゃん知らないし。」

「最近のあんたは、他の先生たちにも良い評価をもらえてきてる。成績だって初めはカンニングがあつたんじゃないかって、言われてたのを、私が証明してみせるって先生たちに話してたのに、あんたは自分で授業中にそれを見せ付けたいらしいわね？」

「どいつも馬鹿ばっかだし」

いざ授業をちゃんと受けてみれば、浅く広くの知識しか教えられない。必要なことを見過ごして、俺が指摘すれば舌打ちされる。下らない授業ばかりで、イライラが余計に増した。

「あ、でも、中井先生は頑張ってるんじゃない？」

少なくともななちゃんの授業だけは、嫌じゃない。けど、やっぱり正面から見れなかった。ななちゃんの声が、俺には苦しくて、苛立たせて、胸を締め付ける痛みをもたらすから。

「それはありがと。それでね、あんたのこと色々調べたのよ」

「何で？」

「最近の豹変振りに、私が疑問を持ったから」

「あっそ」

何か、二人きりで話すのって大好きだったけど、今はものすごく

面倒臭い。

「田所、あんた、去年は成績優秀者だったのね？」

「さあ？」

そういえば、今の俺って、入学してからの俺と同じだ。勉強は簡単すぎてつまらないし、それにつられるダチが集まってきて、うざかったつけ。

「でも、私のクラスになってから、成績落ちたでしょ？」

「そうだった？」

少なくとも、理数系と言うか、古文現代以外はそんなに成績は変わってないはず。

「そうよ。私の科目だけ毎回赤点だったわよ。どれだけあたしが悩まされたか、知らないでしょ？」

「知らない」

そうだそうだ。ななちゃんが担任になった時、初担任で他の教師に比べて接しやすかった。そして、仏頂面だった俺にも話しかけてくれた。友達みたいに全員に接して、その笑顔がどこか初々しくて可愛くて、構ってほしくなったんだよな。方法もよく分かんねえから、とりあえず国語だけは考查もわざと適当に書いた。そしたら、ななちゃん頭抱えて、俺だけ赤点の時は補修だとかで、放課後個人授業してくれた。それが楽しくて仕方なかった。マニュアルにそって、ただ教えるんじゃないで、よく話が脱線するから、それを調子づかせるのが可笑しかった。

「まあ良いのよ。愚痴言うために呼んだんじゃないから」

「じゃあ何？ 授業戻りたいんだけど？」

「ほんとに？ 本当に授業が好き？」

「え？」

即答出来なかった。聞き返してた。適当に流されれると思って言っただけなのに、ななちゃんが食いついてきた。だから、ちよつと戸惑いが生まれた。

「去年のことも聞いて回った。それこそ、先生だけじゃなくて、あ

んたと同じクラスだった子にも。なんて言ってたと思う?」

俺を知る人間の評価か。どう思われてようと、どうでも良い。ただ、俺はななちゃんに良く思われてれば、今はそれで良いはず。なのに、どうして俺の機嫌は晴れないのだろう? 分かんねえ。

「あまりの秀才ぶりに脱帽?」

「馬鹿」

一蹴された。俺が知る限り、ななちゃんは俺にしか馬鹿と言わない。他の奴に言ってるのを聞いた覚えはない。

「すぐくつまらなそう。本気に見えない。楽しくなさそう」

ななちゃんが、何かを言い始めた。俺のことらしい。ははっ、そうか。去年の俺、そんな風に思われてたんだ。人が折角勉強教えてやったりしたのに。何かむかつく。

「そんな評価ばかりだったわよ」

「嬉しいことで」

「でも、今年になってからは、少し違うでしょ? 私の主観だけど、少なくとも去年までの印象とは真逆にしか見えなかった」

「主観だし?」

まあ、俺もそう努めてた。それが俺なのかは良く分からないけど、少なくともその俺は楽しかった。それは認める。嘘じゃない。

「そう。でも、自覚はあったんじゃない?」

「どうだか」

素直じゃない。ななちゃんの言う通り、俺は馬鹿だ。意地を張ってる。意地を張ると苛立ちのようなモヤモヤを感じる。また一つ、勉強になった。知識だけじゃ分からない勉強。本来教師と言うものは道徳を教えることが使命。善悪の掌握のつく人間の育成。なのに、俺が知るのは単に解法を教え、知識を教え、成績を上げる。そんな卒業して就職してみれば、使う機会の少ない、将来子供が出来れば、それに教えて少しの優越感と威厳の保護にしか役立たないようなものばかりで、つまらなかつた。

「ねえ、どうしたのよ?」

「何が？」

半ばうんざり気味で、適当に返答する。どうしてだか、ななちゃんだけは、今の俺に嬉しいと思ってるくせに、俺を褒めない。俺を認めようとしない。他の教師はあの頃の悪行を思うと、今は更生したな、とか褒めてくるのに。

「何があつたの？ 昔のあんたに戻るなんて、何かあつたんでしょ？ お家のことで何かあつたの？」

「別に。ウチは放任だし、何も言わねえもん」

「そうなの。なるほどねえ……」

何かなるほどだよ。勝手に納得するなよ。

「でも、それは違うわね」

ななちゃんが、否定した。ななちゃんが何を考えてるのか分からない。

「いや、厳密に言えば、関係はあるかもしれない。でも、あくまで根本的なこと。もっと何か、あんたを変える出来事があるはず」

勝手に決められても。俺のことは俺にしか分からない。それは他人も同じ。だから俺が努めていることに気付く人間はいない。ただ、去年の俺と今年の俺の違いに、戸惑いを抱く程度だ。所詮、興味の対象にしかない。表面だけで満足する馬鹿ばっか。つまんねえ。

「なあ、先生」

「それよ」

「は？」

話しかけようとしたら、ななちゃんが俺を指差してくる。その指先は俺の口に向いている。

「私の呼び方、元に戻ったわよね？」

「自分で注意したじゃん」

そう呼べって。だから呼んでるんじゃない。四月の頃みたいに。

「何で急に变えようと思ったわけ？ それに私に対しても普通に接してるわよね？」

「それが教師と生徒つてもんじゃないんですか？」

「そうだけど……」

そこで口ごもるなよ。つい、ななちゃんって呼びたくなる。でも、それを俺が許さない。違う。呼びたくないんだ。その名を口に出すと、モヤモヤが一気に溢れるから。俺が俺でなくなるから。

それは恐怖。俺は気づいてた。周り俺が何か違うということに。俺にとつて普通の疑問も、周りには気にもならないこと。それを知りたい俺でも、周りは知る必要の無いことになる。俺は異質。俺はおかしい。そう言われるのが嫌だから、俺は努める。周りが普通だから、それに。

「そうじゃないのよ。私はさ、担任って初めてだから、無知なこと多いわよ。正直、あんたが騒ぎ起こす度に頭と胃が痛くなるし、私の担当教科だけ、赤点取られると、自信なくすのよ。教え方が悪いんだって」

「俺が勉強しなだけでよ。中井先生の教え方は好きだよ」

ななちゃんは、やっぱり今の俺のほうを担当らしくいられてる。だから戸惑う。周りにとつて、昔の俺は異質。それを変えるべきだと思わせたのはななちゃん。そして、変わった俺に苦しんでいるのはななちゃん。だから俺は多分、あれをきっかけにななちゃんから離れようとしてる。でも、ななちゃんがそんなことを言うから、俺は苛立つ。どの俺が俺なのか、どうすれば俺になれるのか、分からなくなる。

「そう。それは嬉しいわ。最近は成績も良くなってきたるしね」

「だろ？」

「でもね、私の我が儘かもしれないけど、今の田所は変」

「本人前に言うことか、それ？」

「ショックだぞ。担任に変なんて言われるのは。」

「あんたはさ、本当に真っ直ぐで、みんなに次はどんなことをしてくれるのかって期待されてる。でも、本当は今の姿が自分なんですよ？　ちよつと前まで、周りと同じ程度に見られるために自分を作ってた？」

「どうして？」

ズキッと、どこかが痛む。ななちゃんのくせに。そう思う俺がいた。

「それは私の質問なんだけど？ 田所はみんなとは違う。よく言う、天才なのかもしれないね」

「頭良いし？」

「そうじゃないわよ。一般人の考えることに対して、疑問を持つ。それは一般人にとって、疑問にならないことでも、あなたにとっては、それを知ろうとしないことのほうがおかしいって思うこと。周りのことが全部理論的に把握できても、行動的に理解できなくなることも多いんじゃない？」

「・・・・・・・・・・」

言い返せなくまでなった。どうして、そんなことに気がついた？ 何で俺の思うことが分かる？ 苛立ちが消えない。

「やつぱりね。あなたは天才よ」

ななちゃんが力を抜いて笑む。俺の好きな笑みだ。だから、少しだけ俺の中にあったモヤモヤが落ち着く。

「私は生徒とも、本音で付き合える教室を作りたいって思ってるの。でも、それはあなたにとっては、苦しいことでしょ？」

「別に。慣れてるし」

もう半年もそうやって来た。だから、慣れた。

「やつぱり、私のせいね」

ななちゃんがテーブルに両手をべたつと付けて、祈るように指を組み合わせて、その手に顎を乗せた。なんか可愛い。

「ねえ？ どうして、元に戻っちゃったの？ 私としては、体調は良くなったけど、あんまり嬉しくないんだけどなあ」

「え？」

何で？ 健康になって、俺が出来る子になったんだから、嬉しいはず。何で嬉しくないんだ？

「よく言うじゃない？ 手の掛かる子ほど可愛いって。だから、ち

よつと今の田所には、寂しさを感じてるかも」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

分からない。何でそう思う？ 俺は勉強が出来る真面目な優等生になってるのに。教師ってのは、そう生徒があれば嬉しいはず。良い大学に行けば、教え子に誇りを感じるものじゃないのか？

「本当に、何があつたの？」

また問いが繰り返される。これが振り出しに戻ると言うやつか。何で同じ質問をまた繰り返すのか分からない。

「なあ、先生」

「うん？」

機嫌を損ねないようにでもしてるのか、優しい声で返事される。俺にはその意味が分からない。

「彼氏いんの？」

「はあ？ 何よ、急に？」

ななちゃんの眉間に皺が寄った。

「俺が謹慎喰らった日、男の車に乗ってたろ？」

「謹慎の日？ うーん・・・・・・・・」

ななちゃんが、どこかを見てる。視線を追うと、教材のダンボールだ。そんなものを見て何が分かるのか、理解出来ない。何で思い出すのにそんな所を見る必要があるんだろ？

「何時ごろだった？」

「ゲーセン行った後だから、七時過ぎ」

「帰宅頃ねえ。ああ。もしかして、白のワゴンじゃない？」

「あん。そう。あれが彼氏？」

「彼氏？ あはははっ」

ななちゃんがおかしそうに笑う。俺にはそれが理解できなくて、何だかモヤモヤが大きくなる。

「何で笑うんだよ？」

それが口から漏れる。馬鹿にされているみたいでむかついて、その笑いが嫌いだ。俺がこうなった原因なのに、笑われると腹が立つ。

「あれが彼氏のわけないでしょ」

それでもななちゃんがおかしそうに俺を見る。

「じゃあ、何だよ？ 誰だよ、あれ」

ああ、言いたくもないのに口から出てくる。それは格好悪いことだから怒りと共に恥ずかしさが大きく俺を晒してくる。

「弟よ」

「・・・・・・・・・・は？」

俺の時間が停止した。ななちゃんの言葉を理解するのに時間を有した。

「いつも迎えに来てもらってるのよ。免許持ってないし、実家まで遠いし。弟の仕事先が近くだからついでに頼んでるのよ」

「・・・・・・・・マジで？」

「そうよ。あ、もしかして、あんたそれが原因でこうなった、とか言わないわよね？」

「・・・・・・・・・・」

うつ。何だよ。あれ弟かよ。だからあんなに普通に寝てたのかよ。何だよ何だよ。めちゃくちゃ勘違いしてただけじゃんか。

「え？ そうなの？」

ななちゃんの驚きの目が、俺を捉える。当の俺は、どうしようもないくらい己の恥ずかしさに襲われていた。

「わ、悪いかよっ」

感情と言葉がすれ違って口から出る。

「あははははっ」

「わ、笑うなっ」

その笑いはさっきよりも嫌いだ。ものすごく恥ずかしくて、勘違いして、勝手に不機嫌になっていたことが情けなく感じて仕方がない。こういう感情は嫌いだ。

「そっかそっか。あんたにも普通なことがあるんだ」

「はあ？ 意味分かんね」

それが普通？ どういうことだ？

「てつきり、天才肌かと思ったけど、そういう部分は普通の男の子
つてことよ。むしろ、その歳にしたら幼いかもね」

馬鹿にされているのか違うのか、判断がつかない。

「でもこれで、気分は晴れたでしょ？ 私は生憎仕事の手一杯で、
彼氏なんていないの。あんたが何を思ったのかは知らないけど、そ
れが原因なら安心しなさい。当分その予定もないから」

暇が無いから、そんな時間はない。ななちゃんのその言葉に、モ
ヤモヤが薄れる。

「まあやつぱりあんたは天才かもよ。ただ、心の成長が遅れてるの
ね。これからは自分の本音に素直になりなさい。誰も受け入れてく
れないことはないから。ちゃんとあんたの考えを理解してくれる人
はいるから」

ななちゃんが、問題が解決してすつきりしたように立ち上がる。
その立ち上がろうとテーブルについた手を、俺は掴んだ。

「えっ……」

ななちゃんの顔に、戸惑いか驚きか良く分からない感情が映し出
された。

「ななちゃんは、どうなわけ？」

ななちゃん、と俺は呼んでいた。そんなことはどうでも良かった。
ただ、確かめたかった。

「私はあるの担任よ。教え子を信じないわけ無いでしょ？」

ななちゃんの優しい声。俺が好きな声。どんな場所にいても聞こ
えるその声に、掴んだ手を握る力が解ける。

「ななちゃん」

「何？」

テーブルの書類を片付けるななちゃんに、俺は席を立つてななち
やんを見る。素直になりなさい。その言葉が俺の背中を押した。

「俺、ななちゃんのことを好きです」

「えっ……」

「だから、俺、ななちゃんが好き。ななちゃんの彼氏になりたい」

だから、言った。今まで行動してきたことの意味を言霊にして。そうする心が間違いないって言ってくれたから。

「え？　ちよっ、何言ってるのよ？」

あれ？　でも、今度はななちゃんの顔が、変だ。

「何って、告白」

それが普通なんだよな？　好きな人に好きって言っ事が素直になること。だから、素直に言った。

「あんたねえ、立場を分かってるの？」

少し怒ってるような声。ん？　俺は何か間違いをしたのか？

「教師と生徒」

「付き合えるわけ無いでしょ。何考えてるのよ」

「え？　何で？　恋人になるのに関係ないじゃん」

「関係あるわよ。モラルの問題。だからそう言うことは言わないの。これは何だ？　振られたってことか？」

「じゃあ、俺が生徒じゃなきゃ付き合えるの？」

「えっ？　何言ってるのよっ」

ななちゃんが慌ててる。そうか。俺が生徒だから、ダメなのか。

「じゃあ、学校辞める。だから付き合って」

「お断りよ。そんな人間と付き合うわけ無いでしょ」

うわ、また振られた。何だよ。生徒じゃなくなるのに。

「せめて、卒業して立派な大人に成ったら、対象になるかもね。とにかく辞めることは私が許さないわよ。あんたは私が卒業させる」

卒業か。じゃあ後半。そしたら、付き合えるってことか。

「話はお仕舞い。授業にさっさと戻りなさい」

ななちゃんが強制的に話を終わらせると、さっさと指導室から逃げるように出ていった。その素早さに、俺はついていけないくて、取り残された。

「卒業したら、付き合ってくれるんだな。よしっ」

何だか嬉しくなってきた。それに変に偽る必要もないって言うてくれた。うん、何だかモヤモヤが晴れた気分だ。

「それまでは、片思いってやつか。うん、悪くない」

何か逃げられたけど、嫌われてない。少なくとも、ななちゃんには、これまでに以上に俺のことを意識付けられたと思う。だったら、後は卒業さえすれば、普通の考えだと問題はないってことだ。それまでは、今まで通りで良いんだ。その中に本音を出しても良いなら、これからのことが楽しみに思えた。

「こらっ、田所っ！ あんたは、ほんとに懲りないんだからっ」

「わざとじゃないんだってば」

「問答無用。大人しくしなさいっ」

いつもの日常が戻る。俺は構って欲しいから、またななちゃんに怒られる。それが楽しくて、嬉しい。

「元の鞘に収まったのかな？」

「みたいじゃね？ 田所もあだし、ななちゃんも何か楽しそうじゃん」

無邪気に笑いながら逃げる問題児を追いかけるななちゃん。それを時折振り返って、好きな子に悪戯をする小学生のように笑う姿に、再びこのクラスは賑やかさを取り戻していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0730e/>

ライフライク

2010年10月8日15時31分発行